

平成 26 年度グラビア研究会第 1 回勉強会に参加して

丸 山 賢 輝*

Takaaki MARUYAMA*

グラビア研究会の平成 26 年度第 1 回勉強会は、平成 26 年 12 月 11 日（木）に印刷博物館のゲーテンベルク・ルームにて開催された。「グラビア印刷を素材から美しく」をテーマにて、特別講演を含めて 3 名の講師の方の講演が設定された。この企画は、グラビア研究会の委員が平成 25 年度および平成 26 年度に見学した素材メーカー 2 社から構成されていて、筆者は、平成 26 年 10 月 24 日の見学先となったメルク（株）小名浜工場での見学会に当社の村田委員の同行者として参加する機会を得ている。2 番目の講演者であるメルク（株）矢澤氏は、見学会の際に技術説明をしてくださった方で、親近感を持って勉強会に参加することができた。

第 1 回勉強会には 37 名の一般参加者があり、総勢 61 名の規模であった（写真 1）。



写真 1 特設受付

1. グラビア切手の魅力と歴史

「切手に見る意匠性素材の魅力について」、一般財団法人印刷朝陽会・植村峻氏より御講演頂いた（写真 2）。

講演内容は日本国内における切手へのグラビア印刷の歴史・発展、世界における切手印刷事情というものであった。

日本国内におけるグラビア切手の歴史は古く、昭和初期

の段階に誕生した。それまでの切手印刷には凸版・凹版の線画方式が用いられていたが、当時で言う逓信省からの要請による、「日本の美しい国立公園の国際観光 PR を行う」事がグラビア切手誕生の背景である。



写真 2 特別講演をする植村峻氏

最初の段階では板グラビア、単色印刷の手法により印刷を行っていたが、輪転グラビア機、線数が細かく再現性に優れるグラビア版といった印刷機周りの開発、印刷適正に優れるグラビア切手用コート紙の開発、印刷再現性に優れたインキの開発等、今日に至る技術が発展した歴史がある。グラビア印刷技術の向上とグラビア切手は切っても切れない関係である。

また、講演の中でスクリーン一杯に映しだされた日光東照宮陽明門の切手の美しさは、参加者の目を釘付けにする魅力があり、グラビア印刷技術を駆使した傑作といえる（写真 3）。

なお日本での普通切手の印刷はグラビア印刷が行われているが、世界の切手印刷事情によると、グラビア切



写真 3 日光東照宮陽明門切手

* (株) T&K TOKA
(〒 354-8577 埼玉県入間郡三芳町竹間沢 283-1)

手は減少傾向にある。また切手のオフセット印刷が行われている国も多く、オフセット印刷の多様性、品質の高さに驚かされた。しかしながら豊かな色彩表現をはじめ、メタリック効果、蓄光効果等の偽造防止技術にグラビア印刷は必要不可欠であり、グラビア切手への今後の期待にはまだまだ目が離せない。

2. 意匠性特殊顔料 パール顔料

「パール系エフェクト顔料とその応用」については、先日工場見学をさせていただいたメルク（株）矢澤氏より御講演頂いた。

パール顔料の構造、粒度、膜厚、光の入射する角度の違いによる色調が変化する原理、パール顔料の分散に適切な手法等の説明から始まり、パール顔料の表面処理、基材の変更による塗料としての多様性については大変興味深い内容であった。

近年ではタバコのパッケージ等にもパール顔料が使用されているケースもあり、身近な製品において意匠性を求められる印刷物の需要が高まっている印象がある。パール顔料の更なる展開に注目が高まりそうである。

3. 蛍光顔料の発光原理・用途

「昼光蛍光顔料の特性と利用について」は、シンロイヒ（株）澤山氏より御講演頂いた。

蛍光顔料といえばアイキャッチ効果、蛍光ペンの他には交通整理などの誘導ポール、非常口案内といった標識などに使われているケースが多くある。

蛍光体の発色原理については、光エネルギーを励起することにより、一般顔料と比較しより鮮やかな発色を示すという事は存じていたが、それにより反射率が100%を超えるという点についてはなるほどと唸らされた。

また、近年では環境対応型の蛍光顔料としてホルムアルデヒドフリータイプも開発しているようだ。建築用塗料をはじめ、蛍光顔料の用途には大変関心が湧いた。

筆者は見学には参加したことはあるが、勉強会等の企画に参加するのは初めてであった。講演会場の後方のスペースには過去1年程度を含めてと狭しと講演に纏わる資料が展示されており、さらに、ほとんどの資料が持ち帰ることができるようになっていた（写真4）。

また講演会後には、印刷博物館内のVRシアター（バー

チャル映像）の鑑賞が勉強会プログラムに組み込まれていた。VRシアターでは最新鋭のコンピュータが創り出すワイドな映像、映像の移動による浮遊する感覚、とりわけ天井画を見上げるように動く表現には体がのけぞり、仰天してしまった。そのほかにも映像技術の素晴らしい点を紹介したい。「システィーナ礼拝堂」で実際に天井画を見る場合は外からの光を頼りに、仰ぎ見る形となるのだが、その際のシミュレーション映像では絵の細かなところまで見ることは大変難しい。今回映し出されたバーチャル映像ではズーム機能の搭載、さらには細かい部分までより見やすくなるように光の補正も行ってあり、最新技術には頭が下がる一方だ。

筆者の拙い言葉ではVRシアターの魅力を伝えきれず申し訳ないのだが、ぜひとも皆様に足を運んで体験していただきたい。

筆者は、インキ関連の仕事に従事しているが、今回の勉強会への参加を通じて、グラビア切手の魅力はもちろんのこと、その技術的背景も知ることができた。

印刷博物館には印刷物・印刷機械の展示はもちろんのこと、壁画の一部、碑文もあればパラパラ漫画の装置もある、さらには印刷を体験するスペースまで用意されている。

印刷物は視覚を通してわれわれに多くの情報を与えるとともに、伝えたいものを残すことが出来るものでもある。アナログからデジタルと変化をしてきた印刷の形であるが、「素材から美しく」という理念も後世に伝えたい。この度の勉強会にはこの場をお借りして、深く感謝申し上げます。



写真4 講演会場風景